

文学部アジア文化学科の取り組み

文学部アジア文化学科担当教員

【 】これまでの実績

昨年度の報告書に、東洋文化学科時代からのいわば「特色ある教育」を目指しての教育理念・目標及びその実績について、その問題点とともに具体的に述べた。ただ本学科の教育目標が、「アジアの現状についての認識と、その現状をより深く理解するための歴史と文化についての知識、ならびにアジアの人びととのコミュニケーションをはかる能力を有する人材を育成する」(1997年4月30日の「アジア文化学科設置認可申請書」、東洋文化学科からの改組転換による)ことにあることだけは、今一度記しておきたい。

【 】本年度の実績

[A] 学科行事としての体験型教育 = 学習活動

4月10日・11日1泊2日 導入教育兼現地巡検 滋賀県マキノ町 マキノパークホテル セミナーハウスで実施 参加学生：137名(欠7名) 引率教員：学科教員全員 在学生チューター14名(7クラス各2名)

以下に、新入生に出した実施要領を載せておきたい。

「2004年度 アジア文化学科主催 新入生オリエンテーション・ツアー 実施要領

目的： 学生生活をスムーズにスタートさせるために、新入生どうし、また学科の教員や在校生と親睦を深める。

集合： 4月10日(土) 13:00 一号館前メイン階段下・茶室「松籟庵」前

場所： マキノパークホテル セミナーハウス

滋賀県マキノ町高木浜2 1-5

日程： 4月10日(土) 13:00 集合、バスで出発。途中日吉神社見学。18:00 到着(予定)。18:30 夕食、ひきつづき全体ミーティング。20:00 クラスごとにミーティング(～21:30ごろ)。23:00 就寝。

4月11日(日) 各自朝食。9:00 レクリエーション。12:00 昼食。13:00 集合、出発。16:00ごろ JR茨木または阪急茨木市駅にて解散(予定)。

費用： 宿泊費・食費(3食)および交通費は、大学が全額負担します。

持ち物： 筆記用具。パジャマ・タオル・歯ブラシなど宿泊に必要な物。健康保険証のコピー。
体育館用のシューズ。ほか雨具など。

服装： 6日のレクリエーションは、スポーツなどですので、身軽な服装で参加してください。

- 注意事項：**
- 1 この行事は全員参加です。健康などやむをえない理由で参加できない場合は、3月25日（木）までに理由を明記して下記宛かならず連絡してください。それ以降に急病などで参加できなくなった場合も、かならず連絡してください。
 - 2 未成年・成年ともに禁酒，未成年は禁煙，成年者も喫煙許可場所以外では禁煙です。
 - 3 その他，大学生として社会的常識に沿った節度ある行動をお願いします。

*これからの4年間，お互いに切磋琢磨する学科の学友として迎え入れ，少しでも学科の教育について理解してもらうためには，期待と不安とが交錯するこの時に，こちらが精一杯応えてあげることが，大きな励ましになると信じて，多くの労力を投入している。勿論こちらのそうした意図を，どのように伝え，行ったら，よりよく理解してもらえるのか等々については，例年反省を繰り返しているのが実情である。また新入生にとって先輩在学生の援助が種々の点で大きいことをつけ加える。（武田秀夫）

バス・ツアー

一、日帰りバス・ツアー

〔実施概要〕

参加学生 アジア文化学科在籍27名，引率教員3名（重松・武田・正信）

緑風観光バス貸切便1台

2004年5月22日（土）実施

- 9：10 阪急茨木スクールバス乗り場からの乗車組，集合・出発
- 9：30 JR茨木スクールバス乗り場からの乗車組，集合・出発
車内で重松教員より本行事についての説明，正信より資料配布
- 12：15 名鉄リトルワールド（野外の世界民族博物館）到着，施設ガイド冊子配布
沖縄の伝統芸能うりずんエイサーを見学後，分かれて施設内の展示物を見学
その際，学生は，野外に展示される世界の建築物を見て回りながら，付設された試着コーナーや試食コーナーを利用し，衣食住にわたる多様な民族文化を体感
また館内各所で，教員による講義や学生・教員間でのディスカッションの時間をもつ
- 17：15 出発
- 20：00頃 往路と同じ行程で，茨木方面帰着，解散（事故はなし）

〔成果〕

- 1 リトルワールド博物館体験ツアー企画は，一昨年度以来毎年実施して今回3度目になるが，

文学部アジア文化学科の取り組み

毎回参加者に好評で、今回も、興味のもてる行事だ、楽しかったとの感想が多くの学生から寄せられた。

- 2 参加学生の主体が、付き添い教員の重松、正信の各ゼミ履修生であることで、各教員による現地講義を実施したが、これによって効果的な体験学習をさせることができた。

〔展望〕

上記の成果をふまえた今後の展望として、

- 1 今回の学科公募の対象は一部の学生にとどまったが、今後、対象となる参加学生を、アジア文化学科全体へと広げていきたい。
- 2 今後、この博物館体験ツアーを、学科新入生オリエンテーションツアー企画や学科教員研修企画としても大いに利用していきたい。
- 3 毎年だされる多くの学生からの要望もあり、次年度も同様の博物館体験ツアーをぜひ継続したい。（正信公章）

今年度で3回目である。事前に紹介、解説してある資料をもとに、興味のある目的地へと向い、その実物（建物、生活の品々の展示物、工夫を凝らしたパネル等々、表情豊かに変な日本語を丁寧話すガイドもいる、勿論美味しい郷土料理も変な土産物も）の中で、彼の地への思いを馳せながら、一人でもた数人で、自由にその空気を思う存分味わえる醍醐味は、また格別でそれぞれにハットするような強烈な印象を学生に刻んでいる（学生に書いてもらっている印象風レポート記からの判断）。それは擬似的でしかないかもしれない。しかし楽しみながら、何かを学べること、知ることの面白みのスリリング、つまりヒヨナナことからフラフラして目的地から外れて自身だけが体験した異文化、異世界を体得する - 会得してほしい - 場（それだけの異国的設備がある）として企画している。2005年度は明治村を組み入れての一泊二日の計画であるが、学生負担金問題がネックになっており、交渉中である。（武田秀夫）

二、一泊バス・ツアー

*実施日時：2004年10月23日（土）・24日（日）

*実施場所 福井県三国町、福井市内、福井市永平寺町、福井市一乗谷

*10月23日（土）

- ・ 09:00 JR 茨木駅に集合し、バスで福井県三国町に向けて出発。
- ・ 12:30 三国町の東尋坊に到着し、付近を見学の後、各自で昼食。
- ・ 13:30 三国町郷土資料館〔みくに龍翔館〕を見学し、越前国の全体像をつかむ。
- ・ 16:00 福井市永平寺町で、曹洞宗総本山永平寺を見学。禅の修行の全体の姿、現在の禅僧たちの生活などを聴取。
- ・ 18:00 宿舎到着。

* 10月24日(日)

- ・ 08:00 徒歩で橋本左内〔幕末の政治思想家で、藩主松平慶永に重用され、大老井伊直弼により、安政大獄で刑死〕の墓に参拝。
- ・ 09:00 徒歩で、橘曙覧〔たちばなあけみ：幕末の国文学者で歌人。万葉調の第一人者と評される〕記念館を見学。
- ・ 10:00 福井市柴田神社・北の庄城跡を見学。戦国末期に柴田勝家が織田信長の命により北陸道の押さえとして築城。現在は城跡は一部が発掘調査済みの形式で、保存・展観されている。
- ・ 12:00 江戸時代の福井城跡〔現在は県庁が建設されている。しかし、石垣など一部の遺構はよく保存されている〕を見学。福井城の名は幕末の政治史に大きな足跡を残した松平春嶽の城である。
- ・ 13:00 福井市立歴史博物館と養浩館公園の見学。2004年3月に城の北側に福井市立歴史博物館が移転新築された。原始から現代に至るまでの展示品の配列は、あたらしいだけに工夫が凝らされており、見学のかいがあった。また養浩館は旧福井藩主松平氏の別邸を保存したものであり、丁寧な保存状態で見ごたえがあった。
- ・ 15:00 福井市一乗谷の朝倉氏関連遺跡を見学。まだ近世の城下町が形成される以前の状態で、戦国大名の居所の代表的な遺跡である。町屋の部分と大名の屋敷地部分が発掘され、一部に復元家屋も立ちならぶ、すばらしい遺跡である。ただし、今年7月の集中豪雨の出水により、遺構の下部が破壊された部分もあった。
- ・ 19:30 JR茨木駅に着後、解散。

今回のバスツアーは、残念ながら学生参加者が6名という少数に終わった。これは7月の福井の集中豪雨による被害が残っているとの虚偽の噂が流されていたこと、また、1万円という参加費が学生にとっては非常に高いという拒否的な心情からの不参加が連鎖反応的に起きたこと、の2点に原因が求められよう。受益者負担はやむをえないとしても、アルバイト収入を学費の一部に当てるものが多い現状では、よほど慎重に負担割合を決めなければ、参加者が減少し続けることになるう。

(奥田尚)

京劇観賞会

日時：2004年6月13日(日) 4:15 現地に集合 4:30 開演

場所：シアター・ドラマシティ(梅田)

内容：湖北省京劇院 京劇『西遊記』「孫悟空、三たび白骨精を打つ」二幕六場字幕あり

費用：S席一般価格8500円のところ、担当者松家が『京劇ニコニコ新聞』購読者(私費で購読)のため優待価格7500円。このうちアジア文化学会から6500円を補助し、学生は1000円を負担。

文学部アジア文化学科の取り組み

定員：19人 引率教員：1人（松家）

申し込み：「中国の芸能と文学2」の履修者を最優先し、その後は教務課文学部係にて、先着順に受付。

以下に意見を付す。

*京劇は人気が高く、すぐに定員いっぱいになった。中国でも超一流か一流の役者と劇団の演じるなじみの演目を、よい劇場のよい席でみるのができたので、鑑賞態度もよく、参加者の満足度はかなり高かった。また、もっとも重要なことは、参加したのはほとんどが関連講義の履修者だったため、教育効果が上がったことである。

京劇を実際に見るのははじめてという参加者がほとんどであり、1000円という負担であったから参加できたが、これより高ければ、未知のものにそれだけのお金を払って参加はしなかったであろうという意見が多かった。

追手門学院大学が学生に提供する文化的催しは、かならずしも多くない。かたや世間に目を向ければ、多くの高校が京劇の貸切講演を行っている。こうした催しは、むしろ学生の自己負担ゼロで行うべきもので、1000円の自己負担は、当日安易に欠席するような学生の申し込みを防止するためのものと考えられるべきものであろう。

また、2004年度は実験的にアジア文化学会の予算で実施したが、大学教育の一環として大学の予算で行う行事であろう。『京劇ニコニコ新聞』の発行元である楽戯社主催の京劇日本公演は、2003年にSARSのため急遽中止された以外、ここ10年足らずの間、毎年行われている。12月の歌舞伎鑑賞と、6月の京劇鑑賞は、むしろ学内で、アジア文化学科を特色づける行事として位置づけられるべきものと考えられる。なぜなら、中国文学の研究者ならだれでも、日本文学の研究者ならだれでもが、京劇や歌舞伎の鑑賞会を講義と関連づけて行えるわけではないからである。

（松家裕子）

「顔見世歌舞伎」鑑賞会 京都南座

アジア文化学科の特色ある教育予算による歌舞伎顔見世鑑賞会は、すでに学科の恒例化した行事として定着している。学生にとって、この企画は歌舞伎という芸能にはじめて実際にふれる機会を提供しており、繰り返し参加することによって、以後、自分で劇場に足を運ぶようになったという学生も少なくない。

また、そういう教育的効果の背景にある観劇費用（入場券代）に対する大学側の補助についても、学生はその恩恵をよく理解しており、それが積極的に参加することの強い誘因となっている。

現在の自己負担額（1000円）を大幅に増額させると、おそらく学生をひきつける企画とはならず、したがって大学側の補助も補助としてその恩恵を学生に理解されないだろうし、なによりこの企画の成立じたいが危ぶまれて、歌舞伎という芸能を実際に鑑賞するという機会を学生に提供できないことになるだろうと思われる。

（永吉雅夫）

〔B〕 カリキュラムとしての体験型教育＝学習活動 「現地演習」・「社会演習」

東洋文化学科からアジア文化学科へ改組する時に学科のカリキュラムの柱の一つとして、苦心惨憺の末、誕生した因縁話は昨年度の報告書に記されているので、ここには昨年度の報告書記載の「1999年度を第1回とし、毎年夏期休暇中に7泊8日の「アジア現地演習」を、中国（北京）、東南アジア（シンガポール・マレーシア）、日本（沖縄）で実施している。それぞれのコースは、学生にレポートを公表させ、それを教員の研究とともに、『アジア観光学年報』として公刊している（創刊号2000年4月、第2号2001年4月、第3号2002年4月、第4号2003年4月、第5号2004年4月）」を再録するにとどめる。本年度実施のレポートは第6号として2005年3月に出版する予定である。本年度実施の記録を以下に記す。

アジア現地演習1（北京） 引率教員：浅野純一助教授 李慶国教授

2004年9月5日（日）～12日（日）に引率教員2名、ティーチングアシスタントの院生1名、参加学生42名で実施した。例年通り、古代・近世・現代の歴史遺跡として長城と明の十三陵および廬溝橋の抗日戦争記念館を参観した。またオプションで準備していた三輪車による北京市歴史的景観区の参観と家庭訪問に、今回は全員が参加した。京劇メイク体験には、13名が参加した。北京外国語学院の学生との交流会には10名の学生が参加した。

それ以外の時間は、事前学習で決めてきたテーマに沿って、2～6名の班ごとに分かれて、各自調査をした。都市交通（特に軌道）、歴史的建造物、不動産についてなど、現地でなければ接することのできない実物を、親しく観察できたことは、秋学期のレポートおよび『観光学年報』第6号に反映された。また公園や繁華街、学園内で、事前に準備したアンケート用紙を用いて人々の対日観を調査した学生もあった。この調査に際しては、北京日本学研究中心の日本側主任竹内信夫教授および同事務主任の畔上氏などセンター関係者に多くの援助をいただいたこと、付言しておく。

今回は上記二つの教育機関にお世話になったが、今後も留学生交換など恒常的に交流をもてる教育関係機関が北京にあれば、本演習もより実り多いものになると思われる。（浅野純一）

アジア現地演習2（東南アジア） 引率教員：井谷鋼造教授 正信公章教授

2004年9月11日（土）～9月18日（土）に引率教員2名、参加学生28名（登録時は30名）で実施。期間の前半は、これまでにない試みとして、クアラルンプールからマラッカを経てシンガポールまで専用バスで移動する行程とした。従来のマレー半島南端周辺だけでなく、首都や歴史のある都市に行動範囲を広げたことで、マレー世界への学生たちの理解も深まることになったのではないかとおもう。今回は、初めてのことであり、全員一緒に行動するというかたちをとったが、次年度以降、同じ行程で実施する場合は、学生自身による現地調査という観点から、可能なかぎり班別行動の時間枠を設定していきたいと考えている。後半は、シンガポールで班別行

文学部アジア文化学科の取り組み

動を中心に実施。一度、現地で活躍する日本の方を講師に招いて、シンガポールを中心に東南アジアの歴史と現状についてお話してもらうことができ、大変有意義であった。（正信公章）

アジア現地演習3（沖縄） 引率教員： 南出眞助教授 奥田尚教授

* 日程 2004年9月2日（木）～9月9日（木）

* 参加学生数 20名〔4回生以上2，3回生5，2回生13〕

* 現地での調査・巡検先

* 9月2日（木） 伊丹～那覇。那覇市街地の中心部を通り、沖縄県立図書館で各自のテーマに関する地元出版物の調査。

* 9月3日（金） 南部の巡検。セファーウタキ，玉泉洞，マブニの丘，イトマン漁港，ガラス工場，海軍司令部壕跡。

* 9月4日（土） 沖縄県立博物館で各自の調査テーマに関する文物の見学。首里城公園の見学。昼食後，各自の設定したテーマに基づく那覇市街地での調査。

* 9月5日（日） 終日，台風の暴風警報のため，外出禁止令を出す。

* 9月6日（月） 台風の暴風大雨洪水警報発令につき，午後3時までホテル待機。3時から宿舎を移動するため本部町へバス移動。

* 9月7日（火） 名護市博物館を見学後，名護市を中心に各自のテーマを調査。

* 9月8日（水） 名護市から那覇市へ移動。午前10時到着後，各自のテーマに基づく現地調査。

* 9月9日（木） 午前中，各自のテーマの調査。那覇～伊丹 16:45解散 （奥田尚）

【C】 学外社会人講師による特別講義

目的：

本講義シリーズの目的は，受講生に対してアジアに関する様々な知的刺激・関心を掘り起こすことにある。そのために，「アジア文化論」の講義（毎週水曜日2時限目）を利用して，アジア文化学科生（必須），人間・経済・経営学部生（選択）約150～200名（春・秋学期ごとに受講生数は異なる）を対象に，学外の専門家を招いて，各分野での経験・知見・ものの見方・考え方などの講義を行っていただいた。

概要：

今年度の特別講師と講義課題は以下の通りである。

<春 期> 「ポップス文化と社会現象から見るアジア」特集

旦 京子氏（チャンネル・アジア代表）「アフガニスタン映画復興の現状」

蓮田隆志氏（大阪大・PDF）「ヴェトナムの農村から1」

旦 京子氏（チャンネル・アジア代表）「アジアを席卷する<韓流> 韓国映画事情1」

斉藤和寛氏（アジア映画評論家）「韓国映画新世代の現在」

丸橋 基氏（アジア音楽評論家）「アジアのポップス事情 1 香港・韓国」

丸橋 基氏（アジア音楽評論家）「アジアのポップス事情 2 東南アジア」

木村 茂氏（本学元講師）「タイ農村から国際化を見る」

講義の効果：

上記の講師陣による一連の講義によって、「現代アジアにおける」「大衆文化の現状」と「それを下支えする都市社会と農村社会の生活」の実態が紹介された。

受講生の反応：

受講生は、＜韓流＞をキー・コンセプトにした大衆映画・音楽や、その対極にある「北部タイ農村の生活実態」に強い関心を持ち、講義後も多くの質問が講師に対して出され、活発な議論が続いた。

<秋 期>「人の移動と文化の変容から見るアジア」特集

概 要：

寺本 実氏（ジェットロ・アジア経済研究所・主任研究員）「ベトナムにおける人の移動と社会変化」

高田 剛司氏（ARPAC主任研究員）「アジアにおける都市開発と地域移動 日本」

大場 昇氏（「昴」会長）「からゆきさんとアジア近代」

高田 剛司氏（ARPAC主任研究員）「アジアにおける都市開発と地域移動 東南アジア」

講義の効果：

この特集講義では、＜人の移動、生態系、文化の変動＞という三つのキーワードによって、現代アジアの諸社会の特質を描き出そうと試みた。東南アジアの国々、特にベトナム、インドネシア、マレーシアを主として、都市化、農村経済、貧困によって生じる地域間（国際間）移動の実態を詳細に説明していただいた。

受講生の反応：

受講生は、特に「からゆきさん」という存在に強く興味をもったようであり、この講義をきっかけに、経済学部での卒業論文の素材とする学生や、文化と移動に関心を持ち始めたアジア文化学科の受講生も出てきた。（重松伸司）

5月21日（金）「中級演習」：

B・Bh・ラジュ氏（ネパール）「ネパールの人たちの宗教と生活習慣について」

お話の中で、ネパールのかかえる厳しい現状についての説明があり、日頃関心がもたれることの少ない小国への注意を聴く者に喚起したという意味で有益であった。

5月28日（金）「中級演習」：

G・P・スプラマニヤン氏（インド）「本格的なインドカレーを紹介します」

講師はインド料理店アショカの元料理長であり、カレー紹介をテーマにした学生の発表に対し

文学部アジア文化学科の取り組み

て種々コメントをしていただいた。学生たちの作ってきたチャイにもOKをだされ、大変な盛り上がりようだった。

6月2日(水)「インドの世界」:

G・P・スブラマニヤン氏(インド)「インドの伝統文化について」

インドの伝統医学と文学について、その文化を生きる人の立場から熱く語っていただいた。

12月20日(月)「入門演習」:

尾崎潤氏「卒業生のお話を聞く」

絵の分野で目下売り出し修行中の東洋文化学科の卒業生に来てもらい、1年生を対象に、現在の活動や出版した絵の本の紹介、大学時代のことなどを語ってもらった。学生は先輩や卒業生の話だと本当に真剣に聴く。(正信公章)

講演会12月13日(月)(5301教室)2時限目 全入門演習クラス(1年生)

岡真理氏(京都大学大学院人間環境学研究科助教授)

「自爆する若者たち—パレスチナが私たちに問いかけるもの」

現在、日本の知の世界の第一線で活躍され、パレスチナほかアラブ世界の实情に詳しい研究者による、1年生全員と一般の人たちに向けての講演会。自身パレスチナをいく度も訪れた経験をもつ講師は、自爆の原因をもっぱらイスラムの狂信とみる見方を検証し、現地に生きる人々、そして現地に起こることがらという視点からとらえなおす。自身がパレスチナで写した写真などを用い、いま世界の耳目を集めているアラブ世界について、ときに熱く、ときに冷静に語りかける講師の話を、ふだん私語で教員を悩ませているはずの1年生みなが、80分にわたり、私語もなく熱心に聴き入った。それは、長く書かれた学生たちの感想にもよく表れていた。その感想からは、学生たちが、この講演によって新たな知識を得ただけでなく、自らの考えかたや生きかたを考えたこともうかがわれ、1年生を刺激する講演会として、例年と同じく、あるいは例年以上に有効であったと思われる。

一般の人たちも、広告は大学のHPでしか行えなかったにもかかわらず、10人以上が参加されていた。

なお、この講演会について支出されたのは、講師への謝金のみであり、講師の交通費、講師への事前のあいさつのための諸費用(交通費・出張費・手土産代)はまったく出していない。今後、講師謝金以外の支出を認めていただけるようお願いする。(松家裕子)